

□佐藤正己博士 Dr. Masami SATO 1910-1984

本誌元編集員茨城大学名誉教授佐藤正己博士は本年 8 月 30 日に逝去された。10 年以上のパーキンソン病との闘病の末に、不幸にも肺炎を併発したのである。哀悼にたえない。君は山形県東田川郡櫛引村の名家の生まれで、御両親とも教育家であり、父上は後に上京して統計学者として鉄道省の要職につかれる傍ら郷土出身学生のための寮 庄内館の経営に尽された方である。元町小学校、府立四中、水戸高校を経て、君は昭和 9 年 3 月東京帝国大学理学部植物学科を卒業、すぐに大学院生、同 13 年 4 月副手の後同年 11 月助手に任ぜられた。君は水戸高校の野原茂六教授の薫陶を受けて早くから陰花植物に興味を持ったが、大学中期学生の時にすでに地衣類に関する報文を発表している。大学院時代の前後にはクリプトガーマン会なるゼミを私的に組織し、後進と共に陰花植物を学んだ。中井猛之進教授が一時陰花植物の分類学を担当されたことがあるので、助手としての君にはその方面の充実が期待されたものと思われる。太平洋戦争に入って昭和 19 年 3 月陸軍技師（司政官）に任ぜられ、同年 9 月ボゴール植物園勤務を命ぜられた。戦後一時東大助手に復職したが、昭和 22 年山形県立農林専門学校教授となり、これを国立大学とするために力を尽し、同 25 年山形大学農学部教授となった。同 29 年には茨城大学文理学部の教授に転じ、同 51 年 4 月停年退職したが、なお求められて同学の非常勤講師を 3 年間勤めた。この間、両大学を通じて多くの後進を養成し、また大学内外の多岐にわたる役職をこなした。君は生来整理能力にすぐれ、快活で万事要領がよく世話好きであり、その人柄からわれわれ大学の同級生との交友も円滑であった。文章は平易流暢で、専門とした地衣類に関する論文のほかにも多くの随筆、紀行文を残した。

朝比奈泰彦先生が本誌の編集主幹となられた第 9 巻（昭和 8 年）第 1 号以来、君は編集兼発行者木村雄四郎博士（津村研究所）を助けて、論文の蒐集、校正の実務のほとんど全部を昭和 19 年まで独力で処理した。この功績は長く記憶されている。

静子夫人とは昭和 12 年に結婚し、2 男 2 女があり、みな幸福に暮しておられる。

（津山 尚 Takasi TUYAMA）

□佐藤正己先生の地衣学への貢献 Contributions to the lichenology by Dr. Masami SATO

佐藤正己先生は旧制水戸高校在学中からすでに地衣類に興味をもち、東京帝国大学理学部で植物学を専攻されたあとも、一貫して地衣類の研究に従事された。地衣類探索調査の足跡は日本の各地を始め、樺太、台湾、北支・山西省、さらに戦後はニュージーランドに及んでいる。この間、数々の地衣学上の新知見を発表されたが、なかでも中井・本田監修になる「大日本植物誌」に収められた「地衣類 ウメノキゴケ目（I）」（1939）及び「地衣類 ハナゴケ目（I）」（1941）は特筆すべきものである。前者ではアンチゴケ科 Anziaceae Sato の新設を、後者ではキゴケ属 (*Stereocaulon*) のなかに Sect.



The late Dr. Masami SATO (1910-1984)

Sacculata Sato という新しい節を設けることを提唱された。どちらも現在の世界の地衣学者にひろく認められている。学生時代から蒐集されてきた地衣学関係の文献を、太平洋戦争中に焼失されるという不幸な出来事があったりしたが、戦後も地衣類の研究を進めるかたわら、一部私費を投入して「地衣学雑報 Nos. 1-13」(1951-55)を刊行して、日本地衣学の普及と発展に大きい貢献をされ、さらに、服部植物研究所が「蘚苔地衣雑報 Vol. 1-9」(1955-83)を発刊するに際して、その編集に参画され、これを世界も認める出版物にまで生長させたことは周知の通りである。一方、1943年には「日本植物総目録 IV 地衣類」(東京科学博物館発行)を編み、当時知られていた日本産地衣類の目録を、主な文献とともに集録して地衣類の研究を大いに促進した。この改訂版にあたる「日本産地衣類総目録(第2版)」は1959年から1965年にかけて蘚苔地衣雑報に発表され、多くの研究者に多大の便宜を与えた。戦後、山形大学や茨城大学において多数の学生を指導され、また、後続の研究者を指導し、示唆を与えるなど、地衣学の発展のために残された功績も大である。茨城大学における激務も漸く落着きを見せ、これから地衣類の研究に専念されるものと期待していた矢先に健康を害され、それを果たされなかったことはかえすがえすも残念なことであった。(黒川 遣 Syo KUROKAWA)